

キャベツ（高原春まき・夏まき）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
作型												
主な作業	<p>は種 -----></p> <p>定植 -----></p> <p>収穫 -----></p>											

キャベツ アブラナ科、原産地：地中海沿岸

作物名 キャベツ

学名 Brassica oleracea L.

作型 高原

ア、発芽温度 15～20℃が適温

イ、生育温度 5℃～25℃の範囲で生育するが
15～20℃が適温である。

(2) 土壌条件

土壌に対する適応範囲は極めて広いが、耕土が深く、排水良好な砂質壤土～粘質壤土に適し、pH 5.8～6.8の石灰及び有機物に富む土壌が最も好適である。

技術体系

1 作型の特徴

冷涼な高原地域の気候を利用した作型であり、本県では500m以上の高原地域で行われている。

(1) 高原春まき

生育期間が梅雨期にあたり、遅い作型では収穫期が盛夏期にあたるために、高温、多湿、多雨等の気象条件が問題となってくる。このため、安定的な生産を行うためには耐暑性、耐病性（萎黄病、黒腐病等）とあわせて耐湿性に優れ、結球揃いが良好で、裂球の遅い品種を選定することが重要である。また近年、この作型での根こぶ病の発生が多く見られ、適切な土壌管理、輪作体系の確立に務める。

(2) 高原夏まき

高温、多湿、多雨等の気象条件が問題となるため、安定的な生産を行うためには耐暑性、耐病性（萎黄病、黒腐病等）とあわせて耐湿性に優れ、結球揃いが良好で、裂球の遅い品種を選定することが重要である。遅い作型では低温期の収穫となり、キャベツは厳寒にも弱いいため、標高にもよるが、8月上旬～中旬が定植の限界となる。

2 適応地域

阿蘇、上益城地域の標高500m以上の高原地域

3 栽培条件

(1) 温度

4 施設装備

育苗ハウス・全自動移植機・ブームスプレーヤー

5 経営目標

(1) 収量 4.0 t/10a

(2) 投下労働時間 83時間/10a

(3) 所得率 34%

(4) 経営規模 2ha

(家族労働力2人の場合)

栽培技術

1 品種と特性

「彩里」

耐病・耐暑性に優れた早生種。初夏～秋どりまで幅広い栽培適応性をもつ。外葉はコンパクト、濃緑色で玉ぞろいに優れる。肥沃な土壌にての栽培に適し、基肥主体で初期生育を促して外葉を作り、結球始めから収穫期まで肥効を切らさないよう追肥を施す。

「おきな」

萎黄病に対して強い耐暑・耐病性品種。玉は濃緑、尻つまりのよい整った扁平球で玉の肥大が良好。甲高で球の肥大性に優れ、夏秋栽培では約60日で1.5kgに肥大する早生種。裂球も遅いので収穫期の

幅が広い。基肥は少な目とし、結球期の追肥が有効。

2 育苗

(1) 播種・育苗管理

- ①育苗用ハウスを利用する。専用床土を128穴セルトレイに詰め、十分にかん水する。
- ②コーティング種子等を1粒蒔きし、覆土、軽にかん水する。
- ③濡れた新聞紙等をかけて乾燥を防ぎ、芽が出たら新聞紙をとりのぞく。
- ④トレイは育苗箱を下に敷き、ブロックやたる木の上に置いて高床式にする。かん水は乾燥しないように朝と夕方に行う。トレイの縁の方は乾きやすいので重点的にかん水する。晩のかん水は徒長を招くのでしない。

⑤ 10日～20日目

液肥かん水は葉色を見て濃度を加減する。葉色が濃い時は水だけのかん水でも十分。

⑥ 20日～25日目

液肥かん水を続ける。かん水量と液肥の濃度を調節して、葉色が淡くて手触りが硬く、根張りのよい苗に仕上げる。

本葉3～5枚が定植適期。定植が遅れると老化苗となり活着が悪くなるので注意する。

3 本圃の準備

(1) 定植準備

本圃は定植20日前に炭酸苦土石灰を全面散布して土とよく混合する(pH 5.8～6.8)。

基肥は畦立て時の同時施肥が多くなっており、肥効も考慮した条施肥が主流となっている。畦は湿潤圃場では高くして、乾燥圃場ではやや低くする。特に生育期が梅雨にかかる作型では、高畦とし排水に留意する。

(2) 施肥

施肥量 (Kg/10a)

	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	
元肥	12	20	10	
追肥	12	0	10	
全量	24	20	20	

※完熟堆肥を2t/10a以上投入

リン酸吸収係数の高い土壌ではP₂O₅は30kg/10a

とする。また、生育期間が比較的短くなる春播きでは施肥量はやや少なめとし、生育期間の長い夏播きでは多めとする。

肥効調節型肥料、品種によっては施肥量を減量する。

4 定植

(1) 苗令 本葉3枚～5枚

(2) 栽植様式

畦幅1.2m、株間30～34cmの2条植え、5,000株/10aが標準となる。

5 定植後の管理

(1) 中耕

除草、追肥を兼ねて、本葉15枚～20枚になるころまでに行う。結球期以後の中耕は、外葉を折り、断根してかえって生育に悪影響を与える。

(2) 追肥

追肥は2回分施とする。

1回目：定植後2週間目くらいに、株元から15cmのところへ施し、軽く培土する。

2回目：結球開始期に施す。

6 収穫

品種に応じた適期収穫に努め、裂球させないようにする。

